みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

『続・平家物語』"攻"の巻が始まる！

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広瀬, 浩二郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4515

『続・平家物語』〝攻〟の巻が始まる！

昨年の12月19日、京都大学の東京オフィス開所イベントにワークショップ講師として参加した。僕が京大に入学したのは1987年だから、もう20年以上も前のことである。当時は「用事があれば京都に来ればいい」というのが京大の基本スタンスだったような気がする。「21世紀になって、ついに京大も東京中心主義に迎合するのか……」。京都の雰囲気にあこがれ、住み慣れた東京を離れて京大に進学した僕は、この20年余の日本、そして自分自身の変化を振り返りながら、複雑な思いを持って本イベントに臨んだ。

最近、僕は各地で〝さわる〟体験型ワークショップ「手学問のすゝめ」を行なっている。視覚優位の現代にあって、僕たちが忘れかけている触覚の楽しさと奥深さを再認識してもらう企画である。このワークショップの中で、僕は平曲の特徴を紹介しつつ、琵琶法師の語りを「全身の皮膚感覚でとらえる」「さわるように聴く」という話をしている。東京オフィスのワークショップでは、あえて「『続・平家物語』〝攻〟の巻が始まる！」という副題を掲げた。東京中心主義におもねるのでなく、奥ゆかしい京都が昨今の軽佻浮薄な世相に異議申し立てをする。いわば西から東への新たな〝攻〟の歴史がスタートする記念のイベントなのだという僕の願望を表現したサブタイトルだった。

平曲を「全身で聴く」際のキーワードが〝交〟である。テレビやインターネットなどに囲まれた僕たちの生活では、視覚情報は目で、聴覚情報は耳で機械的に処理されている。琵琶法師が活躍した中世にはパソコンもケータイもなかった。しかし、僕たちのご先祖様は琵琶法師の語りを聴くだけで、何百年も前の源平合戦の様子をありありと想像することができた。琵琶法師の鍛え抜かれた〝声〟と琵琶の単調ながらも力強い〝音〟、すなわち聴覚情報から、あたかも眼前に歴史絵巻が展開するかのように、視覚情報を引き出していたのが琵琶法師の語りだった。視覚情報と聴覚情報の自由な交流・交換、人間の五感に潜む〝交〟の創造力が『平家物語』を生み育てたのである。

さて、門外漢の僕が言うのもいささか僭越だが、すばらしい伝統を持つ邦楽界がやや元気を失っているのが現状ではなかろうか。箏・三弦にじっくり耳を傾ける若者は減少し、琵琶法師に代表される盲人邦楽家も珍しい存在となっている。だが、ピンチはチャンスなり。精神的に病んでいる現代人に〝交〟の魅力を伝えることができるのは、〝音〟と〝声〟の豊かさに裏打ちされた邦楽の演奏である。今後、時には積極的に〝攻〟の姿勢で伝統をアピールすることも必要だろう。21世紀の邦楽関係者には〝交〟のしなやかさと〝攻〟のしたたかさをぜひ大切にしていただきたい。

さあ、『続・平家物語』の壮大なストーリーが今始まる！

広瀬浩二郎
（国立民族学博物館准教授）

ひろせ・こうじろう
1967年、東京都生まれ。京都大学文学部卒。文学博士。専門は日本宗教史、障害者文化論。「琵琶を持たない琵琶法師」と自称し、「触文化」をテーマとするワークショップを各地で実施している。主な著書に『さわる文化への招待』（世界思想社）などがある。

イラスト＝矢口由美子